1992年6月5日第3種郵便物承認　ＫＴＫ増刊通巻第5742号　　2026年10月29日発行（毎月1回25日発行）

KTK あらぐさ通信

NO.125

後援会費郵便振替口座
０１０７０－７－３２１４５
あらぐさ後援会

編　　集　　あらぐさ後援会
編集協力　　社会福祉法人あらぐさ福祉会
〒617-0813　京都府長岡京市井ノ内広海道42－3
TEL 075-953-9212　FAX 075-953-9215









感謝

みんなおいでよ～あらぐさひろば

たくさんのご来場

ありがとうございました！







10月3日、好天の中あらぐさひろばを開催。あらぐさ40周年の今年、初めて利用者さんのコーナーをつくりお客さんを迎えようと計画。みんなで「何が楽しいかな…」とアイデアを出し合いました。

当日は、ステージやなんでも市、キッチンカーなどのグルメ、利用者さんで準備したゲームやワークショップに、たくさんのお客さんに来ていただき、笑顔いっぱいの楽しい1日になりました。

ーえがおの手しごと展　創　FINAL―

障害福祉センターあらぐさ

12/12(土)12:00～17:00・12/13(日)9:00～17:00

12/14(月)9:00～14:00

会場：長岡京市産業文化会館１Ｆ大会議室



みんなおいでよ～あらぐさひろば







A グループではスーパーボールすくいをしました。
お客さんにポイを渡したり、応援隊で頑張る利用者さん。地域の子ども達の楽しそうな声に思わず笑顔がこぼれました。







B グループではボーリングとわなげをしました。いつも自分たちが楽しんでいるボーリングですが、今日はお客さんが･･･と不思議な様子の利用者さん。でもみんなの楽しむ声を聞くうちに利用者さんもだんだん笑顔に。







C グループでは射的をしました。球拾いや商品渡しなどを頑張った利用者さん。ひろばの雰囲気を楽しみながら、お客さんの対応。子ども達と触れ合い、優しい表情をされているすてきな場面もありました。





ワークセンターでは、クッキー、フィナンシェなど、あらぐさ製品を販売。学生ボランティアさんと利用者さんのチームワークで、お客さんたちに大きな声で呼びかけ、完売しました！





デイ 2 はフェルトの体験コーナーをしました。たくさんのお客さんに来ていただき、はりきっている利用者さん。フェルトを作る様子を見てもらい、誇らしい笑顔でした。

「熊本被災地支援のつどい」
開催します！

12 月 18 日(金)～20日(日)

10 時～16 時

アトリエ畔 （光明寺前）

バザー・ミニカフェ

あらぐさ製品展示、販売など

主催：あらぐさ後援会

みなさん、ぜひお越し下さい。

絵画をご寄贈いただきました。

9 月 12 日、京都イブニングロータリークラブ様より、あらぐさ 40 周年のお祝いに絵画 2 点をご寄贈いただきました。贈呈式では、利用者代表の二人に、土井会長より絵画が手渡されました。永きにわたる温かいご支援ご協力に、心より厚く御礼申し上げます。



あらぐさ後援会総会（６月６日開催）第２部

リレートーク「無認可あらぐさから法人、今、そしてココカラ」より

あらぐさ誕生から 40 周年を迎えました。繋いできた「思い」と今の葛藤を、職員たちが発表しあいました。

通いがいって 何だろう



ワークセンターあらぐさ　三浦朱葉

あらぐさに勤務し始めて、13 年目になります。初めの８年はデイセンター２、その後はワークセンターに異動になりました。このリレートークを機に、改めて 2015 年に発行された「あらぐさの歩み」という冊子を見てみると、ちょうど自分が生まれた年に、さをりとクッキーの活動がスタートしており、同い年なのか…と長年継続的に取り組んでこられたことに驚きました。

共同作業所、そして授産施設を経て、２００７年に現在の就労継続支援 B 型のワークセンターあらぐさが開所されました。一人ひとりにあう毎日づくり、一人ひとりの通いがいそして次のステップとして働くこと・仕事づくりと重点が移り行く中で、仕事と工賃の結びつき、集団化の難しさや個別対応等様々な課題があったと思います。そして、今も、月平均３万円の工賃をお渡しできるよう、グループ一丸となって日々仕事をしていますが、年齢による生産力の低下、仕事への向き合い方、仕事以外の課題等があり、奮闘中です。

ワークの皆さんは仕事をしに通所されていますが、私が４年間一緒に過ごす中で、あらぐさに求めてきていることは工賃だけじゃないなと思う瞬間がよくあります。楽しい事、嬉しい事、達成感もあれば、嫌な事、考え込む事等、いろいろ経験されてきたと思います。デイ２の皆さんもそうですが、ワークの皆さんも話したい、伝えたい、知りたい！という思いは強く、そういったやりとりする時間を求めていると思います。

あらぐさは、仕事や活動をする場所であり、知りたいことを知る場所、解決する場所、安心する場所と、色々な意味がある居場所だと、みなさんの様子から感じています。毎日当たり前に通ってくる場所がある、受け止めてもらえる場所があるというのは、皆さんにとっての「当たり前」で、「安心」に繋がっているとも考えています。しかし、もちろん毎日が同じではないし、メンバー同士の関わりで感じること、自身の体調や家族の変化、ホームのこと等不安なこともステージごとに変わってきています。それに伴い、理解する力も変わってきました。理解できることが増えてきて、余計に不安になる事も増え、悩まれる方もいます。ただ、以前と違うのは、昔はどう声をかけていいか分からない、上手く伝えられない、どうしようと葛藤していた方も、伝わった、分かってもらえたという経験を何度も積み重ね、自信を持って職員に確認してみようという姿が見られるようになりました。

ワークは就労 B 型なので、仕事をする場所でもありますが、安心できる居場所も目指しています。安心できる居場所と思えるようになるには、楽しい時間を過ごしたり、様々な状況や感情にぶつかった時、分からない事があった時に、職員やメンバーとのやり取りを通して、積み重ねてきた経験が大切だと思っています。内容によっては自分から職員に声をかけづらいなぁということもあると思いますが、職員から歩み寄るだけでなく、自分から相談するということも、皆さんと過ごす中でのポイントにしています。自分の言葉で伝え、時間をかけて気持ちの整理をするという経験、その中で、他者の気持ちを考えてみたり、自分なりに受け止めてみたり、職員と一緒に考えていく事で、安心できる居場所になっていくと思っています。言葉の少ないメンバーさんも、職員やメンバーさんとの関わりを通してワークの一員だと意識し、毎日を過ごされています。最初の方に言った、工賃だけじゃないあらぐさに求めている事、それは長年通っているあらぐさで、長年連れ添った仲間との生活の中で感じられるものなのだと思います。



ワークメンバーのＡさんは、視力の低下により以前と同じようにクッキーの作業が出来ず、葛藤する様子が見られるようになりました。仕事に入る時間もクッキーの時だけは遅れるようになりました。他のメンバーは色々な作業をしている中、自分の出来る作業はまたこれか…という思いもあったのかなと思っています。どうしていこうかと職員間で話し、以前は限られた人だけで行っていた朝の会を、ワーク全員参加での朝の会に変更しました。みんなでみんなの仕事を確認し合う時間です。起立、礼、おはようございますからのスタートですが、みんながちゃんと立ってないのにどんどん進める人。職員から「みんな、ちゃん



と立ってはるか見た～？」と声をかけられ、全員立っているか意識し、再度みんな揃って挨拶です。その日の仕事が発表されると、同じ仕事の人と、「よろし～！」と言い合う姿、朝の会と関係ない話をしてくるメンバー、「ちゃんと聞いてる～？」とツッコミを入れるお姉さんメンバー等、朝の会だけで色々な姿が見られます。朝の会の最後には、「今日も一日頑張るぞ、えいえいおー！」でしめますが、この掛け声も気合いを入れないとなかなか揃いません。

そんな朝の会ですが、Aさんにとっては足並みをそろえて、今からみんなで仕事に向かうというこの時間がとても大切です。全員で朝の会をするようになってから、すぐにクッキー室に入れるようになりました。また、クッキーの作業でも皆で輪になり一つのことをしたときの表情はとても嬉しそうで、みんなと一緒に仕事を頑張っていることを実感されていると感じられました。職員から言われるとムッとすることも、メンバーから声をかけられるとすんなりという事も多く、ワークの一員として過ごしているのだなと感じる瞬間です。Aさんの事をお伝えしましたが、そんな時間、そんな毎日を他の皆さんもあらぐさに求めているのかなと思っています。

月日が経ち、平均45.5歳のグループとなりました。実践検討会でも今後の運営プランについてお伝えしましたが、ワークでは「全員で毎日仕事をする」という時期を経て、これからは「それぞれに合わせた働き方・過ごし方」を考えていく必要があるのかなと思っています。過去には、1日のスケジュールとして、仕事をする時間と歩いて体を動かす時間を作っていた時期もあり、メリハリをつけて仕事に向かうという事を大切にされていました。ワークでの仕事への向かい方は時の流れとともに変わってきましたが、共同作業所時代の「一人ひとりの通いがい」は今もなお、大切な視点としてあり続けていると思います。

それが、今私のいるワークセンターあらぐさです。年を重ね、出来る事が増えて、自信がついたり、反対に難しい事が増えたりと、メンバーさんも変化しています。それぞれの思い、それぞれにあった働き方や過ごし方を考え、寄り添いながら支援を続けていけたらと思います。

自分も、つなげていきたい



デイセンターあらぐさ
Aグループ　廣瀬愛

あらぐさに入職して7年目になります。あらぐさには40年という長い歴史があり、私が生まれる10年以上前にできて、現在まで歩んでこれたことは本当に凄いことだと実感しています。私があらぐさにいる6年間は40年間のほんの一部ですが、これまでで私が感じたことや、今とこれからへの思いについてお話したいと思います。

私は2020年の春にAグループの職員として入職しました。その頃はちょうどコロナが流行り始めた時期であり、外出やイベント等いろいろなものが制限されることになりました。ですが、私はこの3年間があったから、入職して何も分からなかったところから、たくさんのことを学ぶことができ、コロナ禍だったからこそ、利用者さんひとり一人とじっくりと関わることができたと感じています。先輩方から、利用者さんへの関わり方から、ひとり一人のペースに合わせた活動、「待つ」ことの大切さ、共感することの大切さ、じっくり丁寧な関り方など、重心の方への支援の土台となることをたくさん教えていただきました。先輩方の支援を見て気づくこと、学ばせてもらったこともたくさんあります。1年目の時は何もできていなかったと思いますが、先輩職員の皆さんが暖かく、丁寧に教えていただけたからたくさんのことを学ぶことができました。そして職員だけでなく、9人のAグループの利用者さんたちが私を受け入れて見守ってくださったから成長することができたのだと感じています。



私が3年目の時、Aグループの利用者さんであった岳人さんとの別れを経験しました。岳人さんはAグループのムードメーカーのような存在で、初めて岳人さんを見た時の印象は、「この方はたくさんの人に愛されて生きてきたんやろうな～」と岳人さんの笑顔を見て思っ

たことを覚えています。私は岳人さんのその姿を見て、あらぐさの職員の優しさや愛情から岳人さんの生き生きとした姿が生まれて、岳人さんはその受け取った愛をみんなに与えてくれてるんかな～と、そんな風に感じていました。１年目の時に周りの職員から「ワシが廣瀬を育てるんやで～」と言われ、岳人さんが元気に声を出している姿を何度も見てきました。初めは特に深く考えたこともなかったのですが、２年目になって新しい職員が入ってきたときに、岳人さんがその職員の姿を優しい表情でずっと見つめていた姿を見つけ、周りの職員が言っていた本当の意味がわかったような気がしました。岳人さんや他の利用者さんの笑顔には何度も支えられたことが多く、私は支援者として仕事をしているけれど、利用者さんたちも私たちのことを支えて育ててくれているんだと思いました。



そんな岳人さんとの別れは私の中でとても大きな出来事でした。大切な利用者さんとの別れを初めて経験したとき、私はこの２年半の間、たくさん支えてもらってきたのに何も返せていなかったのではないか、と後悔の気持ちが残りました。今の自分に何ができるだろうと考えるきっかけにもなり、これからたくさんのことを学び、グループをもっと良くしていきたいという気持ちと、後悔のないように利用者さん１人ひとりと今できる関りを大切にしていきたいと改めて感じました。この気持ちは今でもずっと大切にしています。

４年目からは新しい利用者さんを迎えて新体制のＡグループになりました。コロナも落ち着いてきてイベントや外出も少しずつできるようになってきました。新しい利用者さんや職員のみなさんから教えて頂いたことも多くあります。支援で何を大切にしているか、先輩方が言葉だけでなく利用者さんの姿から教えてくれたこともたくさんありました。「利用者さんたちが活動を楽しみながら取り組めるようにどんな関りや工夫をしたらいいか」、「どんな取り組みだったら楽しむことができるか」、など色々なことを考えて実践している中で、嬉しそうな笑顔で活動を楽しむみんなの生き生きとした姿が見られた時、この仕事の楽しさや面白さを改めて実感することができました。

グループで、１人ひとりのペースを大切にし、個々の活動と、みんなで取り組むイベントなどの集団を大切にした活動に取り組む中で、利用者さんの新しい姿に気づくこともできました。この数年間のＡグループでは、年齢を重ねるとともに利用者さんの身体や機能の低下を感じる場面も多くありました。食形態が変わったり、歩行機能が落ちてきたり、「できなくなること」に向き合う瞬間もあります。でも私がＡグループにいた６年間の中で、興味の幅が広がり「やってみたい」という思いが大きくなってきた人、苦手と思っていた活動を楽しめるようになった人、喜怒哀楽を職員にしっかり伝えてくれるようになった人、集団で過ごす力がついてきた人…。１人ひとりが内面での豊かさを広げて成長している姿がありました。利用者さんのこういった姿が見えたのも、気づくことができたのも、これまでの何十年という歴史の中で、Ａグループの職員が大切にしてきた支援の軸になるものをしっかりと受け継ぎ、現在までつないできてくれていたからだと思っています。日々の支援は１人では成り立たないことで、グループというチームで支援ができる環境やグループとしての土台があるから気づけたことなのではないかと感じています。

あらぐさはこの４０年間の長い歴史の中で、いろいろなことが変わっていったように、これからも時代の変化とともに自然と変わっていくこともあれば、みんなで変えていく必要があることも出てくると思います。私はあらぐさに来て、たくさんの人との出会いやこれまでの経験の中で、いろいろな価値観や考え方を学ぶことができました。いろいろな思いや考え方を知れば知るほど悩むこともあり難しさを感じることもあります。でも悩んだ分だけ相手の気持ちに共感することの大切さや、相手の立場になって考える力など、人との関わりの中で大切にしたい視点を持つことができたように思います。これは利用者さんと関わる時でも、職員同士でも大切にしたいことです。私は７年目の現在もＡグループに所属していますが、今、私が感じていることは、これまで職員のみなさんがＡグループという土台をしっかりと作り、受け継いできてくれたからこそ今のＡグループがあのだと思っています。そして、私自身も、これまでたくさんの人からいろいろなことを学ばせてもらい、いろいろな経験をさせてもらい、見守ってくださった方や、色々な場面で支えてくださった方たちがいて、今の自分があるのだと思っています。

この６年間で学んだことや経験できたこと、先輩方が受け継いできてくれた思いを大切に、今のＡグループやこれからの世代にも繋げていけるような人になりたいと思います。



「暮らしたいところで　暮らしたい思い」



ケアホームいろどり　松本友貴

私がいろどりに就職してから丸 5 年が経ちました。日中、それぞれの場所で頑張ってこられた皆さんに「おかえり」を言って迎え、ほっと一息ついてもらえるようにして、また翌日に「行ってらっしゃい」と送り出すことができる場所で働きたいと思い、いろどりを選びました。

入職したてで何も分からず、あたふたする私に「もー！しょうがないなぁ～。次はこれするんやで！」と教えてくださったり、拙い介助でも委ねてくださったり…本当に利用者の皆さんに助けて貰ってばかりでした。そんな中でも少しずつ関係ができてくると、お家での出来



事やご家族とのやり取り、ガイヘルでのお話をしてくださったり、表情や行動で何となく、こんな風な気持ちなのかな、と思えるようになりました。

あらぐさ等の通所施設、そして週末のおうちやガイヘルなどのお休みの間の暮らし、そしていろどり…と、皆さんの毎日を構成するひとつになれているのかな、と思うようになりました。

私が入職した時は 4 泊 5 日か 5 泊 6 日で週末お家に帰る方がほとんどでした。特に、女性利用者さんは急な土日対応もほとんどなく、ご家族の頑張りにも支えられて 4 泊か 5 泊いろどり、週はおうちという形で皆さんの生活が回っていました。

しばらくは、はじめに思っていたように、平日に仕事や活動を頑張って帰ってこられた皆さんを迎えて、いろどりでゆっくりしてもらい、また元気をチャージしてもらって翌日送り出すという、イメージそのままで働いていました。

ですが、年数を重ねて、ご家族とお話する機会も増えて、目の前の皆さんのご様子だけでなく、お家の事も知っていくにつれ、今の形のままこれからもずっと続いていく訳では無いのだと思うことが増えました。ご家族の体調や、ご年齢のことご家庭の状況は様々ですが、どんどん家に帰ることが難しくなっていく状況になることがよく分かりました。

皆さんはいつも、楽しそうにあらぐさ等であったことを話されます。困ったことがあっても「〇〇さん、も一仕方ないなあー！」と利用者さん同士がよく知っている仲だからこそ、そう言い合えるような感じも見てきました。ヘルパーさんの中には「もう何年も前からこの人のことを知っているねん」という方もいます。そんな様子を見ていると、仲間も職員も周りの人も、馴染みの人が沢山いる『この地域で暮らしていく』ということは、こういうことなのかなと感じます。

また、頑張ってきた仕事の話を楽しそうにしてくださったり、仲間と過ごすからこそ、みんなの中で活動をするからこそ起きる困っていることを話してくださったり、毎日足取りよく笑顔であらぐさに向かわれたり、連絡ノートを読んだ時嬉しそうにされていたり…そんな姿を見ると、皆さんあらぐさが好きなんだな、と思いますし、皆さんのこの暮らしを大切にしたいと、いつも思います。

昨年度あたりから、いろどりの女性利用者さんの中にも、様々な環境の変化で家に帰ることが難しい方が出てきました。これまでも男性利用者さんで、ご家庭やいろどり等で暮らしていくのが難しくなり、入所施設等へ行かれる方がおられ、「寂しくなるなあ」と感じていました。そして、日々密に関わってきたいろどりの女性利用者さんもそういった状況になってきて、改めてより深く考えるようになりました。

私個人としては、皆さんが暮らしたい場所で暮らして、通いたい場所に通って生きていけたらいいなと思います。「自分の暮らしたいところで暮らしたいように暮らす」という思いは、誰もが当たり前に叶えられるべきだと思うからです。また、そのお手伝いができるなら頑張りたいと思います。ですが、それと同時に、今の状況で今すぐにいろどりが 365 日開所することは難しいのだろうとも感じています。一人の方の休日泊にも思うように応えきれない中で、今のままだと 365 日開所になる未来があまりうまく想像できません。入職時からずっと、いろどりの 365 日開所が求められていることを色んなところで耳にしました。懇談の時など、



ご家族のお話から切実な思いを感じることも多いです。
いま、皆さんの「この地域で、あらぐさに通いながら暮らしていきたい」という思いと、それに応えたいのに応えきれないもどかしさの狭間にいるように思います。
もう少し職員が居れば何とかなるのかな、と思ったりもしますが、人材確保もなかなか難しいのだろうと思います。だからと言って、職員がいないからということを理由に、作業的に支援をしたくはありません。ちゃんと皆さんの暮らす場所でありたいと思っています。
いろどりで、この地域で、皆さんの暮らしをどう支えていくのか？それを一緒に考えていけるような新たな職員と、これからたくさん出会えればとても嬉しいなと思います。
今回このリレートークをするにあたって、これまでのあらぐさの歩みについて再度学び、ここまでご家族が取り組んでこられたこと、その気持ちをしっかりと受け継いで、「ではこの先、職員という立場で何ができるのか？」を考えていかないといけないなと感じました。
いろどりで暮らしを支える職員として何ができるのか。なかなか答えは出ませんが、皆さんの当たり前の今、当たり前の暮らしを守りたいと強く思います。

思いを語れること



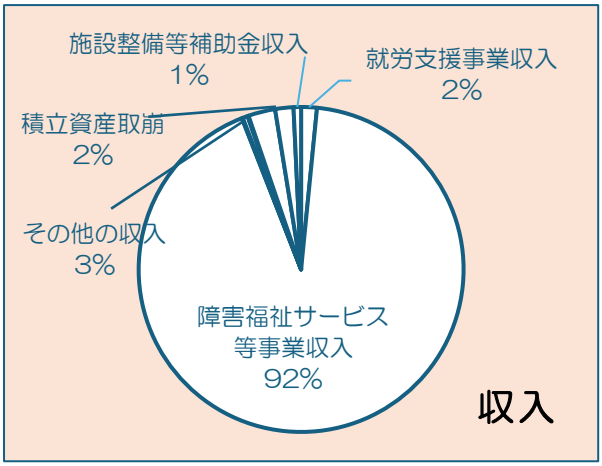
デイセンターあらぐさ
Ｃグループ　森下純平

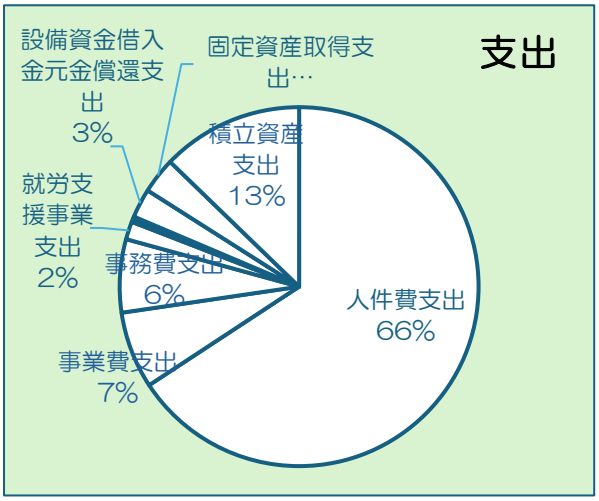
私が、きょうれさんの研修を通じてあらぐさのビジョンを考えるという経験をした中で感じたことが、理念の大切さに改めて気づきました。あらぐさが４０年を迎えて、これからのあらぐさを考える時にこれまでのあらぐさが何を大切にしてきたかを忘れてはいけない。きょうされんの研修の中でビジョンを作り上げていく中で他の事業所の意見もとても参考になった。あらぐさでも抱えているような課題がどの事業所でもあり、より深刻な状態になっていると感じる事業所もある。
人手不足（職員が５０代以上、新卒は入らない）、利用者の高齢化、老障介護、経営（事業縮小・休止）など。制度が不十分なことでどの事業所も影響を受けている。
その中で事業を継承していくこと、世代が変わっていく中（職員も利用者も）、無認可作業所から認可事業所を作ってきた人たち（人材）から次の人たち（人材）にバトンを渡せるか、次の４０年で何ができるのか自分たちで考えていくことが大切。
現場で感じることは、老障介護の問題である。立て続けにＣグループの利用者が入所施設に行くことになったということである。



家族が限界までみていたが、自宅での過ごしが難しくなり、入所施設に行くという選択肢になった。本人たちにとっては入所施設に行ったことは生活の安定につながるという結果になっているようだが、他の選択肢はなかったのかと考えてしまう。
国は入所から地域を進めているが、現状で入所施設に救われているという現実がある。重度の障害のある人を支援してきたあらぐさであるが、あらぐさでもどうにもならないという状況がある。あらぐさはどこを目指すのかということ、その中で今まで重度の障害のある人を見てきたということを、忘れてはいけないと感じる。
それはあらぐさの強みではあると感じる。大切にしながらも、その大切にしてきたことによる大変さもあると感じる。
これからのあらぐさの４０年を考える時にどう運営（経営）していくかも大事であるが、そのために理念が変わってしまってはいけない。現状で理念通りにはなっていない部分もあるが、理念は目指すべき所だということも言える。あらぐさが残り続けていくことを優先しながらも、理念を目指すということ忘れてはいけないと感じる。理念にどこまで目指せるかが大事。
「自分が頑張れば」で解決する問題ではないが、できることはしたい。制度や社会が変わらなければ良くならない。きょうされん運動を通して学んだことは、すぐには変わらないかもしれないが、継続していくことの大切さ。あらぐさが続いていくことの大切さがある。
目の前の課題に向き合っていくから始める。あらぐさのできること、良いところをひとり一人が意識する。語れるようになることが継続していくことに必要。
家族や職員に「法人理念を守れるのか（守れているのか）」と問われた時に、ひとり一人が答えることができるようになれたらと感じる。
自分たちのしていることに自信を持って、あらぐさに誇りを持てることが大事。入所に行く事になった家族からもあらぐさに通えて良かったと言ってもらえている現状。これで良いというわけではないが、あらぐさに通えていたことがとても大事。自信を持つことは人材確保にもつながる。自信を持って人に勧めることができる。あらぐさの事業継続のためにも、一人ひとりの自信、誇りをもてるようになることができればと考える。

令和７年度　社会福祉法人あらぐさ福祉会　財務状況





総事業収入
5 億 1363 万円

収入

障害福祉サービス事業収入

・障害福祉サービスに対する国、地方公共団体からの介護給付費

支出

人件費支出…常勤職員 52 人　非常勤職員 77 人

事業費…主に利用者の活動に関わる支出

事務費…運営事務に要する支出

借入金元金償還支出…建物・土地の借入金返済

（令和７年度の特徴）

収入の部では、生活介護の新たな加算算定や共同生活援助の利用が高まっていることなどから９％増収となりました。

支出の部では、人件費が総支出の６６％と大部分を占め、昨年度比で微増しています。設備資金借入金元金償還支出として、総支出の３％を借入金返済にあてています。固定資産取得支出としては、積立資産を取崩し、エアコン、複合機、パソコン車両の入れ換えなどをしました。障害福祉センターで経年劣化による固定資産の買い換えや修理などが増えてきています。

令和７年度事業報告及び財務諸表は、あらぐさホームページに公開しています。 http://www.aragusa-fukushi.jp/

２０２６年度　あらぐさ後援会会員　加入・更新　ありがとうございます！

（２０２６年４月１日～８月１５日　敬称略　）

赤城博子　秋山喜美江　芦田幸子　芦田昌夫　東俊明　新井嘉彦　荒木満　荒木まち子　阿波谷陽子　粟野亜希子　生路智子　池島三千江　石井俊吾　石堂宏宜　石橋清子　石村和子　五十棲福男　伊地知洋晃　伊地知有華　一箭浩志　伊藤弘紀　稲葉薫　井上敏子　今井三郎　今井正　今井里香　今西さよ子　今西正恭　上田晃圓　上野志保子　大城まゆみ　太田政喜　大槻和子　大槻さつき　大槻拓哉　大槻典子　大橋雅人　大畑京子　大林雅子　小川直　小川貴士　奥山千壽　小澤由美子　乙訓イケダ住設建材有限会社　乙訓地区労働組合協議会　小野留美子　垣内望美　（医）片岡診療所片岡卓三　片山雅代　加地祥志　勝山宏一　桂誠司　金子美智子　鎌田桂子　亀川義昭　亀口公一　神田千秋　菊井誠　北村弦　木下美智子　木村栄美子　木村まき子　木村由紀子　木村嘉男　金原道雄　久保節子　鞍貫聡史　黒木サキ子　斉藤泰樹　崔本明美　坂下三良　坂下佳子　坂本靖子　株式会社坂本建設　相良乙若　佐々木規子　佐藤卓利　佐藤洋　佐名木良実　澤月子　志賀妙子　四方政則　篠原秀子　柴田和泉　嶋本芳輝　嶋本美恵　清水大輔　清水陽一　シャーロン美容室岩崎早苗　浄土真宗本願派仏厳寺　高千穂空　高千穂光正　白石直子　新庄佑三　杉本佳都子　鈴木千賀子　角誠一　角攝子　住田珠江　住田初恵　瀬川信也　関節子　宋彦一　園信孝　髙橋久美子　竹下久美　竹下誠　武永健二　田坂靖子　多田美智恵　建山昌子　田中栄治　谷口奈緒子　谷口弘子　千脇正子　辻岡佳子　津田拓也　出口志鶴子　東宮健史　東宮靖武　苫廣享子　冨島ますみ　冨永洋子　富森尚子　内藤敬子　長岡天満宮　中川美智子　永崎みさと　永崎靖彦　中路克介　中西理栄子　中西いく子　中村文子　仲本幸代　中山恵美子　中山千恵子　中山光雄　名倉真実　西幹男　西井美千代　西山いづみ　野畑光代　野村秀明　橋本さつき　長谷川朋子　長谷川長昭　波多由紀子　畠中清子　畠中勇治　花木健祐　林慶子　原田文孝　ぱんだ企画　久本幸満子　菱田葉子　平井多津子　平野和彦　平野元子　昼神仁美　廣岡冨美子　廣瀬彩子　広瀬美砂　福島緑　福見印刷企画(株)　福見泰昌　福村真理子　福山八千代　藤井正樹　藤本秀延　細井創　細井雅代　堀医院堀直樹　堀江幸男　堀口悦布　前川明雄　前田幸子　前田仁　前田真之介　前田知臣　増田弘子　増田康夫　増田靖子　町田摂子　松井幸子　松居正利　松浦佳織　松田侑子　松田恵美子　松村誠　松本正義　松本美津男　松山幸次　真殿尊子　三浦朱葉　三木孝子　三橋眞子　南俊秋　三宅州人　宮田啓子　三柳美里　村井悦予　村井浩　村上久代　村野英介　毛利靖子　森清　森垣美知子　森上郷　森川浩世　森下純平　守屋伸江　森山正博　八木幸一　安井洌　安井芳幸　安田耕治　安田隆　安武梢　安武真理　薮見富喜男　山口計子　山口隆史　山口武彦　山田外光　山田陽子　山中繁　山本朝栄　山本恭子　山本眞弓　横川和男　横川喜美江　横川安子　横山和子　吉田克巳　吉田美津恵　吉村龍二　米村久美　渡辺裕子　山崎諭　（匿名１２名）

（８月15日以降にご加入･更新された方は、次号に掲載させていただきます。）

あらぐさと私たち

京都イブニングロータリークラブ

平田　善洋　さん

（ひらた　よしひろ）

（写真：後列右端）



京都イブニングロータリークラブの皆様

祝　４０周年

あらぐささん、４０周年おめでとうございます。

私たちは、あらぐささんが下海印寺で活動しておられた頃より交流をさせていただいております。当時、当クラブは京都西山ロータリークラブの名称でしたが、あらぐささんが成長しながらも、当クラブも京都イブニングへの名称となり、共に成長してきたような想いがあります。

振り返ってみますと、あらぐささんは、当時、無認可の時代、共同作業所あらぐさの形で、何とか活動拠点を見出すため試行錯誤されておられました。当クラブとして何かお手伝いはできないものかと問い合わせしたところ、少しでも関わっていただけたら、施設から遠出できる機会が殆どない、という言葉をいただいて、当クラブとして色々と知恵を絞った経緯があります。

その一端として、初めてのバスでの遠出、美山町へのリンゴ狩り、市内でのお芋掘り、園内でのバーベキュー交流、現在の場所に移転されてからは、「みんなおいでよ～あらぐさひろば」での「なんでも市」が形づいてきたように思われます。「なんでも市」では、クラブ会員が余剰品の販売をしながら、通所者の皆さんの作品を見学させていただき、当日の参加者の皆さんと共に楽しんでおります。

昔、あらぐささんへの協力のため、野菜販売を開催したことがあります。その時は、近くの野菜売り場からクレームが起き（安いので）、販売している理由を告げ、何とか了解していただいた笑い話もあります。

時代は常に変化しますが、今後も、皆さま方の明るい笑顔と行動力で発展されていかれることを会員一同祈念しております。

美山町　リンゴ狩り





バーベキュー風景



芋ほり　大収穫





なんでも市

1992 年 6 月 5 日　第 3 種郵便物承認（毎月 1 回 25 日発行）2026 年 10 月 29 日発行
ＫＴＫ増刊通巻第 5742 号　発行所　京都障害者団体定期刊行物協会
〒604-8804　京都市中京区壬生坊城町 48-6　京都社会福祉会館 2 階
京都難病連内　発行人　髙谷修　頒価 50 円（購読料は会費に含まれています）